

今月の

逸品

NO.21 2016.12

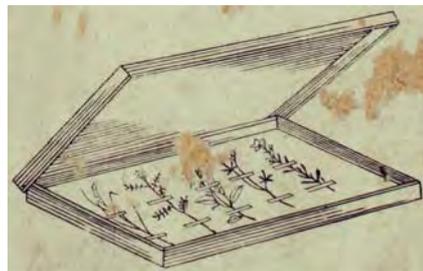


草木乾腊法

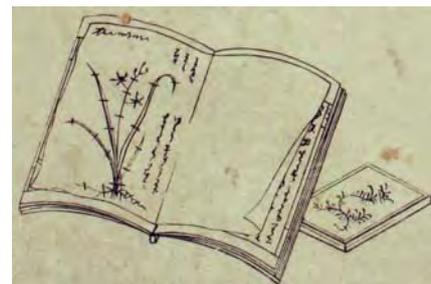
1875 (明治8) 年

(外寸) 510 mm × 380 mm (本紙) 478 mm × 340 mm

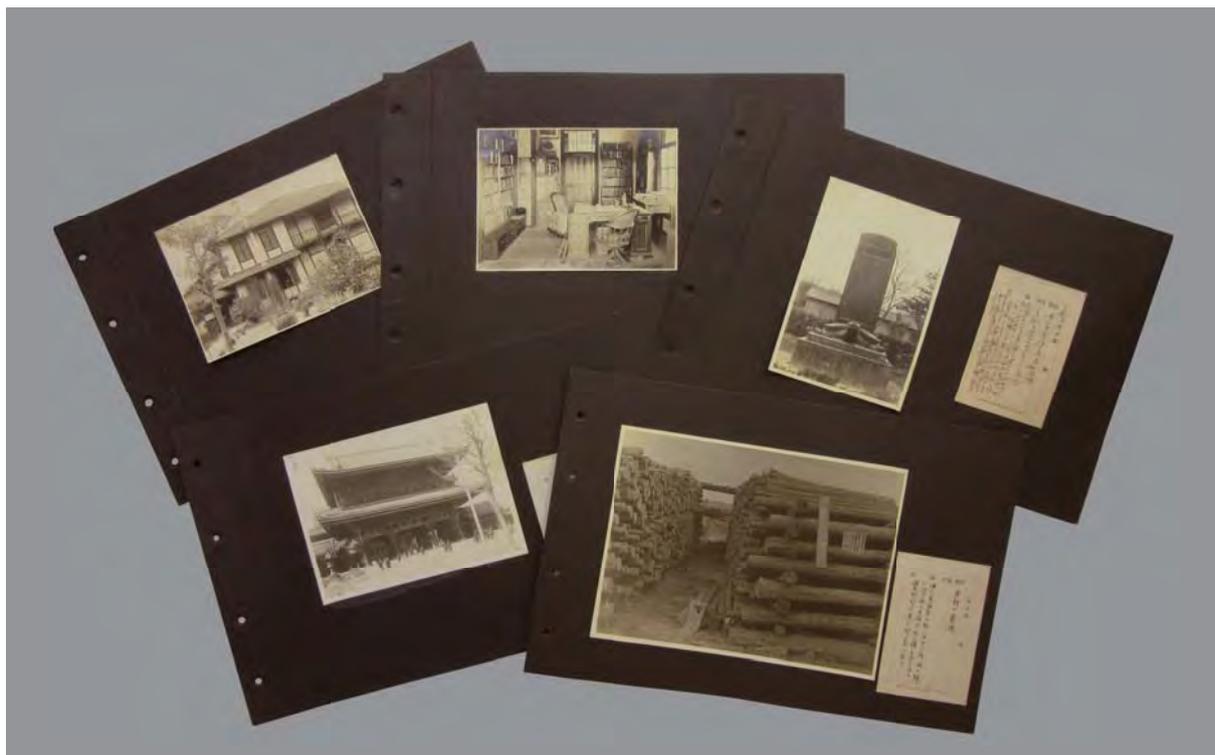
草木の花葉について、標本の作成方法を記した印刷物。奥書によれば、後に日本初の理学博士号を取得することとなる伊藤圭介の文章を久保弘道が校正したもので、服部雪斎による挿図を付して博物局から出版された。漢文調の格調高い文章に、かなり細かくふりがなが施されており、初学者向けに作成されたことを推測させる。花葉を浄紙に挿み、板に挟んだ上で、書物または石を用いて圧して水分を抜くといった基本的な作成方法を記した上で、多肉の花葉のごとく乾燥しにくいもの、柔らかな花・若葉・藻類、硬い樅・ツガ類などに関して、それぞれの作成方法を提示している。また、火力を用いる時の注意点や保管方法を記すなど、内容は微に入り細を穿つものといえよう。本資料は、現在、掛図の形状に仕立てられているが、他機関の所蔵資料と照合すると、掛図へ改めるに際し、本来、存在していた 1.2 cm 程度の余白部分を切断したであろうことが判明する。



〈厚紙に貼したるを重ね管に納貯ふ図〉



〈腊葉出来上りの図〉



郷土写真

台紙 337mm×225mm 1930年代  
 京都府女子師範学校 郷土研究室

京都府女子師範学校郷土研究室が作成した写真アルバム。黒地の台紙に1枚ないし数枚の写真と解説文を貼付したもので、写真が欠落したものも含め、130枚の台紙が伝わっている。京都市内の寺社を中心に、城南や丹後の情景、学校足下の淀・伏見から稲荷にかけての風俗、さらには北海道・樺太の景観を写した写真が存在する。1933（昭和8）年に郷土研究室が発行した『郷土教育の概要』には、250点以上の写真の所蔵が記されているが、そこには現存写真と対応する名称を確認することができ、昭和8年以前の写真が基本になっているとみてよい。ただし、稲荷・伏見・淀を撮った写真には、1937年の年紀を裏面に記すものがあり、その後の増補がうかがえる。1930年における師範学校への郷土研究設備費の交付、翌年の師範学校規程および教授要目の改正によって、各師範学校は、郷土研究室を整備して郷土教育に力を注ぐこととなるが、このアルバムは、京都府女子師範学校での郷土教育の実態を考える上で、格好の資料といえる。



宇治川鶴匠



国境標石（樺太）



やかんはどうようかこう  
ケーニッヒ氏躍焔波動用火口  
こうしかく  
光四角回転鏡

島津製作所製造

120mm×110mm×290mm 290mm×220mm×370mm

ルドルフ・ケーニッヒによって19世紀半ばに発明された音の波形を観察する装置。通常は光四角回転鏡と一緒に用いられる。躍焔波動器、波動炎実験器などともいう。下部からガスを流し込み、上部で炎を点火させる。管の中部には、外部から音を入れる集音部が設置されている。この集音部は、セロファンフィルムのような薄い膜で、ガスが流れる通路と隔てられており、音を入れることでこの膜が振動し、ガスの流れを変化させる。ガスの流れの変化は、上部の炎の長さを変化させることとなり、この炎の変化を観察すれば、音の様子が調べられるというわけである。しかし、炎の変化は肉眼で確認するにはあまりにも速く、そのため光四角回転鏡を用いる。炎は回転鏡を回すことで連続した帯状に映る。音を入れると炎の変化が波打って映し出される。横軸が時間軸となり、回転鏡を回す速さが速いと波が伸びて観察される。今のオシロスコープのような音の波形観察装置である。



〈集音部の分解写真〉



A



B



C



D

南極の石

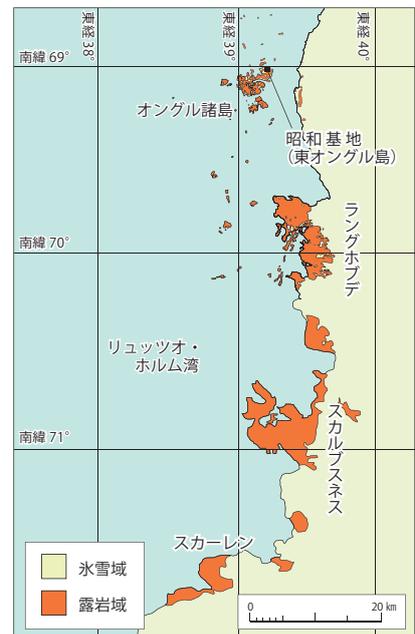
A：片麻岩（東オングル島）

B：黒雲母片麻岩（東オングル島）

C：ザクロ石片麻岩（ラングホプデ）

D：ザクロ石片麻岩（スカーレン）

南極観測隊として南極へ行った蜂須賀弘久（第 10 次 1968-70）・中川和久（第 35 次 1993-95）・坂東忠司（第 37 次 1995-97）の採集資料（それぞれ A、B、C と D）。南極には、5 億年以上前の岩石が多く分布するが、昭和基地周辺のザクロ石片麻岩もそのひとつで、赤紫色で数mm～数cm大のガーネットが散在する。詳細に見ると、それらの鉱物が方向性をもって縞模様をつくっており、これが片麻岩の特徴（片麻状組織）である。プレートの衝突で地下深所に達した岩石が、強い圧力と高い温度の環境下に長期間おかれると、もとの鉱物組成や組織は大きく改変され、性質の異なる岩石「変成岩」となる。片麻岩はこうしてできた岩石で、黒雲母を主体とした黒雲母片麻岩なども変成岩として知られている。南極では、地球ができて間もない約 40 億年前の岩石や、アンタラクティサイトと呼ばれる初めて見つかった鉱物、中生代・新生代の地層の存在もわかっている。雪氷で覆われ、閉じ込められている南極からは、これからも新しい発見が期待できる。





### 足踏み式オルガン

日本楽器製造（現：YAMAHA）1909（明治42）年  
1430mm×740mm×1190mm

京都学芸大学が京都師範学校から引き継いだ 20 台のオルガンのうちのひとつ。日本楽器製造（現在のヤマハ）が製造した「足踏み式オルガン第 19 号」という型式のリードオルガンで、製造番号より 1909(明治42)年2月から3月につくられたことがわかる。61 鍵の鍵盤に、音色をかえるためのストップ（音詮）が 13 個つき、内部には高音部と低音部とに各 4 列の笛が存在する。ペダル操作で減圧された袋が、リードを震わせながら空気を吸い込むことによって音が鳴る仕組みだが、この空気袋が大きく設計されているため、ペダル操作には力が必要で、空気を効率よく取り込める反面、細かなコントロールが難しい。また、細かな音のニュアンスの表現には、空気袋の状況を足の裏で感じとらなければならず、奏者に高い技量が求められる。販売時の広告によると定価は 350 円だったようで、米価をもとにこれを換算すれば、現在の約 140 万円と試算される。当時の授業料が年額 22 円だったことに照らしても、かなり高価なものだったことが推測できよう。



明治 45 年当時の広告



リードオルガンの内部  
(解体修理作業時に撮影)